

「伝 統 を 越 え て」

狂言役者・演出家
茂 山 千之丞

狂言の歴史

いまご紹介頂きました、狂言という日本で一番古い芝居を演じている役者で、他には何の取柄もない男です。貧乏暇なしと申しますか毎日あちこち走り回って狂言をやっておりますけれども、それほど偉い男でも、また変わった男でもございません。ありふれた役者の一人でございます。ただ、私のやっております狂言というのは、いま申しましたが日本で一番古いお芝居、あるいは世界でも最も古い演劇の一つに属するかと思えます。お集まりの皆様は、狂言についてはかなりいろいろ知って頂いているかと思うのですが、中には余りご存じない方もあるかと思えますので、最初狂言についてちょっとだけ説明させて頂きたいと思えます。

狂言というのは、生まれたのは今から600年以上昔だといわれております。室町時代の初め頃、あるいはもっとそれよりもさかのぼるのではないかと一般にいわれております。ともかく大変古いお芝居です。それが現代まで連綿と演じ続けられてきた。そこに狂言という芸能の中に、一つの伝統というものが生まれてきたわけでございます。しかし、狂言も生まれたときから伝統を持っていたわけではないし、生まれまじるときには当時の現代劇でございました。室町初期の現代劇、ちょうど私たちがいま、テレビでドラマを見たり、あるいは劇場でいろんなお芝居を見ます、あるいはコントとか漫才で笑う、音楽を聞く、ロックを聞くと、それと同じように室町初期の方、中世の方は、狂言を見て笑い、かつ楽しんでたわけでございます。だから元々古めかしいものではなくて、当時としては最もモダンな斬新なお芝居でございました。それが時代の流れの中で、次々と新しい芸能が生まれます。江戸時

代になって来ると歌舞伎とか、あるいは文楽とかいったお芝居が生まれてくる。そして明治以後になりますと、ヨーロッパのいろんなお芝居のやり方が入ってきて、いわゆる新劇という新しい演劇がおこってくる。

ところが相変わらず狂言は、昔のやり方のままでずっとその間もやり続けられてきた。これは世界でも大変貴重なといえますか、珍しい例だと思えます。そういうことで狂言がそういう時代の流れの中で、古い形、古いやり方、古い精神といえますか、そういう物を持ち続けていまままで演じられてきた。そこに狂言が、伝統演劇とか伝統芸能とか言われるいわれがあるわけでございます。元々がそういうふうな室町時代の庶民の人たちの中で生まれましたものですから、非常に庶民的な明るさを持っているのが、狂言の特徴でございます。

狂言をご覧になったことがないお方でも、あるいは学校時代、中学とか高校時代に狂言の台本の一つぐらひは勉強していらっしやるかもわかりません。太郎冠者というのが登場いたしまして、そして笑いの種を蒔く、有名な曲では「すえひろがり」とか、ご婦人の前ではちょっと言いにくいですが、「ぶす」という作品が著名でございます。「すえひろがり」にしろ「ぶす」にしろ、それが演じ始められたのは、おそろく500年以上昔ということは間違いない、大変古いお芝居なんでございます。

私の家がいまご紹介がありましたが、私の四代前、初代茂山千作と申すのが井伊大老、井伊掃部頭直弼に気に入られまして、井伊家のおかかえ狂言役者でした。江戸時代は能とか狂言、能についての説明は時間もございませんので致しませんが、能と狂言は一般の庶民

「伝統を越えて」

から隔離されまして、武士階級、江戸幕府を中心にする侍階級の中の、一式楽 儀式の音楽とされました。一般の庶民の演劇芸能としては、歌舞伎とか、文楽とか、その他の踊りとか、そういう物があったわけです。武士階級の中で式楽、一種の儀式の演劇とされましたために、大変堅苦しいものになってしまったわけでございます。そういう物でしたので、当時の能とか狂言を演じます者は、侍の資格があります士分というので姓字帯刀を許され、そして各地方のお殿様、藩主にサラリーで召し抱えられたのです。そしてそのお城の、その藩の行事、たとえば子供さんが生まれたとか、あるいは先代の殿様の13回忌だとか、あるいは代替りだとか、そういうときにお祝いの、あるいは法要のための能とか狂言の公演をやる。それにでること、それから藩主の人に能とか狂言とかお囃しを教える。そういう事が生活の糧になりまして、つまり侍として扶持をもらって生活していたわけです。私の家がたまたまその時に、彦根の井伊家に抱えられていたというわけです。

ところが、明治になりまして、新しい政治体制が出来まして、そういう古い封建的なシステムというものが、形の上で瓦解してしましまして、能役者も狂言役者も一時路頭に迷った。サラリーマンでなくなったわけですから、わずかばかりの退職金をもらって、細々と生活していたのが、明治初年ごろの様子でございます。その当時こういう話がありました。遊んでいられませんか、能の役者も狂言役者も、他の仕事につきました。京都におりましたある能の役者が、当時警邏といいました今の巡査になりました。そして、こそ泥を捕まえた。こそ泥を捕まえてみたら、そのこそ泥も元能役者だった。こういう実話がございます。その当時、いろんな生活をしていたのです。

ところが私の家は、たまたま彦根藩に抱えられておりましたけれども、京都にずっと住んでおりました。350年前から京都に住んでいたのではろうと思われまします。私はいま茂山 千之丞という名前ですが、私の兄は、茂山 千五郎と申しまして、いま人間国宝にして頂いております。私より4つ年上の兄貴、後から度々出てきますので、この4つ上だということを覚えておいてください。私が4つ下でございます。兄は昔からずっと年上です。不思議なものです。その千五郎が、茂山家の12代目の宗主ですから、ざっと310年

位になるのでしょうか。と申しますのは古い記録が例の戊辰戦争、蛤御門の変、あるいは鳥羽伏見の戦い、その時に家が全焼致しまして、古い伝書が全部なくなったそうです。そこではっきりしたことが解りません。ともかく300年以上京都に在住して狂言をやっている。そして江戸の末期にたまたま、彦根藩に抱えられていましたが、京都にずっと住んでいたのです。京都という土地柄、あるいは京都、大阪、堺、こういう近畿地方の町は江戸時代でも特殊な生活、政治の様式を持っていた。幕府直轄の都市ですが、しかし、実際はその町の中で実質的な制度、自治権限が非常に強く行使されていました。特殊な雰囲気があったようです。私たちの狂言も江戸時代は、先ほどちょっとふれましたが、江戸時代の狂言役者というのは全部、各藩主のお殿様のお抱えになって、武士階級に完全に組み込まれてしまっていたのですが、京都、大阪の狂言役者は、そうでなくて京都の町方の人、町衆という言葉がいま流行っておりますが、町衆の人たちのバックで狂言をやっていたのです。そういうために、明治の初期の世の中の急変にも関わらず、生活の基盤というものがほとんど変わらなかったのですから、京都では私の家なんかは、こそ泥にも警邏にもならず狂言をずっとやっていた。こういう訳でございます。それだけに、京都の私たちがやっている狂言というのは、あるいは江戸時代のもう一つ前の時代の、つまり狂言が生まれました時代のいろんな雰囲気、エネルギーとか、あるいはバイタリティを持ち続けていたように私は思われるのです。そういう中で私たちが、私が育ちました。

狂言というのは簡単に申しますと、笑いのお芝居、喜劇でございます。お芝居もいろいろ種類がございます。喜劇と悲劇の違いはよくお解りだと思いますが、お芝居をどういうふうにするかということで、大体大きな二つのやり方がある。一つは今のテレビとか映画がそうなのですが、実際に我々が生活している日常の行動、たとえば家で寝起きし、ご飯を食べ、お風呂にはいる、会社に出勤し帰って来るという様な日常の行動、動作をそっくりそのまま役者はやる、そして一つのお芝居が出来上がっていく。これを写實的、リアリティなお芝居と言えるかと思ひます。たとえば物を食べる時には、映画とかテレビの中では本物を食べます。お酒を飲むときには、撮影の最中に酔っぱらって出てしまうと困りますので、本物という訳にはいか

ない。そこで偽物を使いまして、お酒とか焼酎の場合にはお湯とか水で代用にいたします。それから色のついたお酒、たとえばブランディーとかウイスキーの場合は番茶で代用することが多い。ときどきウイスキーの中に酒柱が立っていることがございます。そういうふうにして偽物を飲むわけですが、ちゃんとコップの中にはそれらしい物を入れて飲む。これがつまり日常的な、日常行動そのままそっくり演じる写実的なお芝居の一番代表的なものです。

芸能の本質

考えてみますと、お芝居というのはそういうお芝居だけでなく、むしろそうじゃないお芝居の方が多い。例えばこの京都会館、この舞台ではしばしばいろんなお芝居が演じられますが、この舞台で役者が演じます時には、たとえば何か物を食べるときにも、コップはあります。お銚子を出します。ビールピンなんか出しますが、その中には何も入っていない。空のコップと空のビールピンの中から出てくる目に見えないと言うより、ないお酒を飲む。こういう違いがございます。物を食べる場合でも、どんぶり鉢があってお箸がある。そこまではありますが、そのどんぶり鉢の中にはご飯もお蕎麦も何も入っていない。それをお蕎麦を食べているように、ご飯を食べているように、役者がみせるわけです。お客に表現するわけです。お客様は、“あーあれは、どんぶり鉢の中からラーメンをすすって食べているのだ”という一つのイメージーション、想像をはたかせて、お芝居を見ていただく。つまり、役者というのは、そういう風にお客を騙す。一種の嘘をつく訳です。役者というのは全部嘘つきです。嘘のうまい人ほど上手だと言われています。私も役者のかたわれです。今日私の喋ることはたぶん、ほとんど嘘だと思いますので、今日の話の何処かよに行ってお話にならないように、恥をおかきになるのは皆様でございますから。責任は一切もちません。そういう事で、実際の日常生活とはずいぶんかけ離れた事をやるお芝居の方がむしろ多い。舞台でやるお芝居というのは、ほとんどそうです。

例えばオペラというお芝居がございます。私はなぜか最近よくオペラの演出をやっておりまして、海外でもやったことがあります。去年はアメリカへ行きました、日本のオペラを持って行ってやったのですが、そ

ういう事で最近ではオペラとの関わりが深くなったのです。オペラという芝居も考えてみると変な芝居です。こうやって私がおしゃべりしている、日常喋っている事ではオペラとしては成り立たない。つまり喋る言葉を、せりふを全部歌にして歌うわけです。「うぉー」というような声を出しまして。しかし、あのオペラの歌手、どんな有名な歌手であっても、家へ帰ったら普通に喋っているわけです。表から「ただいま」（オペラ風に）と言って入って来るのではない。「ただいま」と言って入るのです。あんな事は日常生活には有り得ない。特におかしいのは、“アリア”というのです。一番の聞かせどころです。たいがい主役の人が歌います。私も演出したことがあります。オペラの中です有名で、日本を舞台にした“蝶々夫人、マダムバタフライ”という名作がございます。この中で大変有名な歌曲があります。“アリア”「ある晴れた日に」という名前で紹介されております。ピンカートン 蝶々さんが愛する夫、ピンカートンがアメリカに帰ってしまう。実はこのピンカートンは、アメリカ本国には、女房も子供もいるわけです。そういう事を隠して日本で蝶々さんと結婚してしまう。蝶々さんは、非常にピンカートンを愛している。本当に自分が唯一の妻だと信じているわけです。その夫がアメリカに帰ってしまう。そして、有名なバルコニーに出まして、長崎市にその跡があるというのは不思議なものです。嘘の物語にちゃんと場所が残っているというのは、おかしいものですが。そこに立ちまして、そして有名な時間にして約7分間ぐらいに及びます“アリア”を歌います。ピンカートンに対する想いのたけを、長々と歌い上げるのですけれども、しかし実生活の中で、あんな事は有り得ない。だいたいおかしいのです。長崎の海岸の方を向きまして、バルコニーに立ち、アメリカの方を向いて歌うわけですが。だいたい長崎の海の向いというのは、支那大陸、中国大陸です。ずっと地球を半周以上しなければアメリカに向けないのですが、まあ、それは良いとしまして。

しかし、例えば皆さんが、今日はいろんな、いろんなと言うのはおかしいですが、多岐にわたる年齢の方がいらっしゃいますが、今夜、ホテルか旅館に泊まっていられる方は、そのホテルか旅館の窓を開け、九州あたりから来ている方もいらっしゃるでしょう、愛する夫が九州にいらっしゃるでしょうね。愛してな

い方もあるかもしれませんが。その愛する夫に向かって、自分が「今、あなた寂しいでしょう。私が京都にきて寂しいでしょう。」という想いのたけを、5分、6分にわたって、歌にしてお歌いになる。京都にもちゃんとお急車というのがございます。ピーポーピーポーと、あなたを迎えにきて、しばらく九州にお帰りになれないだろうと思います。病院の鍵のかかったところに放り込まれるのは請け合いでございます。しかし、あのばかばかしいような“アリア”がなければ、あの名曲がなければ、おそらくあのバタフライというオペラは、上演されないだろうと思います。それほど素晴らしい歌曲です。しかも、その嘘のあいつ歌を歌い上げることによって蝶々夫人がピンカートンに対する想い、夫を恋する想いというのが、普通に我々が喋っている以上に、あるいは数十倍の説得力を持って、お客に迫ってくる。こういったものが実はお芝居の本質であろうと思います。

つまり、お芝居というのはこしらえものです。嘘の世界、嘘の物でも本当らしく見せないで、嘘は嘘のままではあっと放り出してしまって、そしてその表現の中で、お客様にリアルな演技、つまり日常生活のような表現だけでは、とうてい達し得ないような強烈なインパクトを観客に与える。こういう物がお芝居の本質だと私は思います。日本の古いお芝居も、みなそういうような嘘の虚構と申しますか、こしらえものが非常に多いお芝居、私のやっております狂言も、その中の一つで、ともかく狂言を一度ご覧になるとおわかりになると思いますが、狂言の舞台というのは何も舞台装置がございません。全部役者が自分の台詞としぐさの中で、自前で、自分でやってしまうのです。せりふで全部言ってしまうので、昔からせりふサービスと言うのですが。

伝統芸術の伝承

そういう特殊な芸能でございますから、これを伝承していく、受け継いでいく、そのためには今の教育、音楽教育なんかと違った独特の教育方法を使うわけです。私たちの家、狂言の家に生まれますと、否応なしに小さい時分から狂言の稽古をさせられて、そして稽古を積みまますと、なるべく早く舞台へ出そうとします。これを初舞台と言います。普通は、昔からこれをお聞きになったことがあるかも知れませんが、日本では

芸事は6才の6月6日から稽古を始めると上達すると、これは京都、大阪辺だけの言伝えかも知れませんが、京都ではそういう風に申しました。だいたい私の家でも、6才と申しますのは昔の、つまり満ではございません。数え年の6才ですから、4才あるいは5才にかかる時分から稽古を始めるのです。私、実は孫が一人おりまして、今年小学校1年に入ったのですが、この孫も満4才の時分から稽古を始めました。4才半ぐらいの時に舞台に立ちました。普通そういった様に4才から5才ぐらいで初舞台を踏む。もちろん我々、子供は、その時分の事は覚えておりません。みんな自分が初舞台を踏んだときの記憶はないと思います。気が付いたらいつの間にか狂言をやっていたと、こういう様な境遇の中で狂言をやり始めるわけです。ところが私が初めて舞台に立ったのは、一般より少し早く、2才と8ヶ月で初めて舞台に立ったのだそうです。今言ったように私、記憶がないのです。全然覚えておりません。

なぜ私がちょっと早く舞台に立ったかと言いますと、ちょっとしたエピソードがございまして、私、先ほど申しましたが、ちょっと思い出して頂きたい。千五郎という兄がございまして、何度も申しますが、4才上でございます。私は今、千之丞というのは、これは芸名でございまして、税金を払うときに、この名前で払っている。本名は、選挙権を行使するときには、千之丞じゃございませぬ。政次(まさつぐ)というのが私の本名でございます。千之丞が芸名、私の兄貴はちょっと変な名前、本名を しめ と申します。漢字で七五三 と書く。これは話を聞きますと、私の家では昔から12月28日に、しめかざりなど、全部終わってしまうのです。そのしめかざりが終わった途端、兄貴が生まれた。そこで、しめ という名前がついたのだと、嘘じゃなさそうなんです。その しめ、そして芸名が千五郎。だから子供の頃、初舞台を踏んでしばらくの間は、私は21才までは、政次という本名でやっておりました。兄貴の しめ というのは、35、6才頃まで しめ という名前で行っていたと記憶しております。そういう風にして、はじめ初舞台以降は、本名で行っていたのですが、先ほど申しました通り、教え年の6つぐらい、兄貴は確か4才と3ヶ月ぐらいで初舞台を踏んでいますが、4才になる少し前ぐらいから稽古を初め、つまり私が生まれました時分にばつばつ、もう兄貴は稽古を初めていたのです。

「伝統を越えて」

これも関西、特に京都の一つの昔のしきたりかも知りませんが、昔はおなごしさんと言っておりますが、女中さん、今はお手伝いさんと言わないと叱られます。お手伝いさんがいた。今はなかなかお手伝いさんが少なくなりましたけれども、私が子供の時は、どの家でもちょっとした家だと、お手伝いさんの一人か二人は居りました。私の家にはだいたい二人のお手伝いさん、私にはおなごしさんと、その方が親しみやすいと思いますが、おなごしさんが居りました。おなご衆と書くのだと思います。そのおなごしさんが、二人居りまして私の家ではどういう名前の女の人が家に奉公に来て、おなごしさんになりましても、いつも同じ名前と呼ぶのです。つまりおなごしさんの襲名と言いますか、それがあったわけです。私の家では“おなかどん”というのと“おうめどん”という二人のおなごしさんが居りました。だから、何とか聖子ちゃんというのが私の家に来ましても“おなかどん”、みゆきちゃんが来ましても“おうめどん”、となってしまうわけです。私の生まれましたときに“おなかどん”と“おうめどん”が居りまして、“おなかどん”の方が先輩だった。次々、“おなかどん”が辞めてしまっ、誰かが入ってきて“おなかどん”になったわけです。その時に“おうめどん”が先輩だったわけです。今度、“おうめどん”が辞めまして次の“おうめどん”が来ましたので後輩になった訳です。

私、先ほど申しましたように、家が大変人の出入りが多い家庭でございますから、母親も手がまわらないので、子供のいろんな細かいことは全部女中さん任せ。その兄貴、つまり しめちゃんの方の係におなかどんがなった訳です。年が上ですから。当然私はおうめどんが係になった。しめちゃんの方は私が生まれた時分、もう狂言をやっており、稽古を始め、まもなく初舞台を踏んで、豆狂言師と言われちゃはやされる。私は小さいですから、おしめをして、びーびー泣いていた頃でしょう。おなかどんの方は、しめちゃんが舞台に立って鼻が高いわけです。人気があつて。そうするとおうめどんとしてはおもしろくない。早く大きくなれ、早く大きくなれと言って育てられたらしいです。そのうちもう、ともかく早く舞台にたせたくて仕方がないわけです。

そこでおうめどんが、一大決心をいたしまして、私に狂言を教えたのです。と申しますのは、狂言の

稽古というのは、先ほど伝承、特殊な形だと申しましたが、つまり洋楽のように楽譜とかがない。台本らしいのはあるのですが、ほとんど台詞は口写しで教える。師匠と弟子とが向い同士で板の間に正座をしまして、タカタックと大きな声で一つの台詞を言いますと、こちらの弟子が同じようにその台詞を言い返すのです。ところがこれが、非常にでっかい声なんです。狂言を初めてご覧になる方は必ず質問されます。「どうしてあんなに大きな声が出るのですか。」「どうしてと言われても昔からこういう風に喋っているのです。」と答えるのです。これは元々、狂言も能もそうなのですが、野外劇だったわけです。先ほどちょっとお話がありました、薪能というのは全国いたるところで行われておりますが、実はこれははっきり言って、新しいイベントでもなんでもない。能とか狂言は元々あいつた形、野外で演じられるもので、能とか狂言が屋内に入りますのは明治になってからなんです。それまでは全部野外だった。野外ですから小さな声ではお客に全く聞こえません。いま私はマイクの力を借りて、スピーカーを通して、皆さんの耳に私の声が達しているのですが、狂言の時にはこんな声は使いません。もっと特別な声、営業用の声を使います。営業用の声と言うのは大体出演料を頂かないと出さないのです。しかし、今日は皆さん大変たくさんお集まり頂いておりますので、特別スペシャルサービス。狂言の声をちょっと出してご覧にいきます。ちょっと離れます。

これはこの辺りに住まいいたすものでござる 太郎
冠者あるか はあー、御前に

こういう声を出して喋ります。狂言というのは、特別大きなレッスン場とかいうものはございません。家の中で教えるわけです。家の中でこの声を出して練習するわけですから、家の中だけじゃなく辺り近所、向う三軒両隣までピンピンと響きわたって、狂言師の家の回りの人は、大概狂言事は少し覚えております。まして同じ屋根の下で生活するおうめどんですから、兄貴を祖父が今のような形で、口写しで狂言を教える、それを全部聞いているわけです。その内に覚えようとしなくても全部覚える。

私の母は、今年91才になりましたがまだ元気なんです。母は、狂言の家に嫁入りしましてから70年以上

になりますでしょう。18才で家に嫁いで来たそうですから。そうすると、大概の狂言は全部覚えております。私も舞台上でミスすることがあります。台詞を間違えたりいろいろしますと、楽屋へ入って行くとすぐ叱られる。母に叱られます。じゃ、母にやれと言っても出来ないのです。出来ないのですけれども、間違えるとすぐわかってしまう。怖い人なんです。そういう事でおうめども、全部それを覚えてしまった。覚えてしまうと、今度は僕に早くそれを教えたくなる。父や祖父に任せておくと、数え年の6才にならないとなかなか教えてもらえないというので、私に台詞をまず教えようとしたのですが、ところが昔の事ですだから、狂言とか能とか言うものは女の人に教えてはいけなかった。大変な差別ですが、昔はそういうしきたりだった。昭和の初めごろです。大正の終わりですか。そういう世の中でした。まして家の女中さん、おなごさんたるものが、その家の大事なぼんぼんに、可愛い可愛いまあちゃん、私まあちゃんと言うあだ名なんです、まさつぐですから、まあちゃんに狂言を教えるなんて事は、もってのほか。叱られることは目に見えております。そこで私を家から連れ出しまして、別に誘拐した訳じゃありません。私の生まれましたのは、京都の、京都御所というのがございますが、そのつい東側ですが、そこにおりました関係で、子供たちの遊び場というのは、その京都御所の芝生の上、広い芝生がございまして。そこへ出て、私たちは子供の時分、遊んでいました。そこへ私を連れ出しまして、その芝生の上に私をすわらせ、何メートルか離れた所に、そのおうめどもちゃんと向かい合って座り、恐い顔をしながら、そのおうめどもが私に、“これはこの一”という台詞、狂言の一番最初に私たちは“いろは”という狂言がありますが、親が子供に、いろはは四十八文字を教える。一番最初の狂言としては非常にふさわしい。時間も6分、7分で全部終わってしまうような、簡単な作品です。それを私の家の方でやるわけで、兄貴のしめも当然それを最初稽古した。だからその“いろは”の文句を全部、おうめどもは覚えていたわけです。その覚えた“いろは”を京都御所の芝生の上で私に、父や祖父が兄に教えていると同じような形で、口写しの形で、教えだしたのです。

ところが、私は当時非常に頭が良かった。天才少年と言われた。今はもうぼんくらでございます。すぐ覚

えちゃったのだそうです。3ヶ月ぐらいで全部覚えた。まあちゃんが台詞を全部覚えてしまうと今度は、大体狂言の稽古は台詞を覚えると今度は型と申しまして、仕草を手取り足取り教えるわけです。ひとつひとつ。ところが女中さんは稽古場に入れませんから、その仕草、型の方はわからない。これを教える訳にはいかないのです。どうしても祖父とか父に教えてもらわなければいけない。早くその仕草を稽古して、早く舞台上に立たせたい、早くまあちゃんの初舞台が見たいという一念からおうめどもは、恐る恐る父の前へ出まして、「まあちゃんは“いろは”のことばは全部覚えてはります。」と報告した。大変祖父と父に叱られたそうです。叱られたそうですけれども、本当に言えるのかどうかということで、私は祖父の前に呼び出されて「いろはの言葉を言ってみろ」という訳で言われたのだそうです。そうすると、もう一度言いますが私は頭が良かった。ぜんぶ、全然間違いないに、台詞を言ってしまったのだそうです。これは「ほんまものだ」ということで、あらためて台詞の稽古をしなまし、やがて型、仕草も習いまして、2才と8ヶ月で私は舞台を踏んだ、とこういう事になっております。私はそんな風にして、人よりは少し早く、舞台を踏んだ訳です。それからずっとこの年になるまで、狂言を演じ続けております。約64年ほど狂言をやっていることになるかと思ひます。

私はそういう家、つまり家全体が狂言だと言ってもいいと思いますが、狂言そのものの雰囲気を持った家、狂言の伝統の中にとっぷり浸かっていた家。めったにお出にならない方が、ときどき私の家に来られるとびっくりされることあるのだそうです。私の兄、年上のしめさん、いま、千五郎さんと二人で喋っていると、ときどき狂言の言葉が日常会話の中に出て来るのだそうです。それは、自分たちは全然意識なしにやっているのですが。そういうような、文字どおり狂言にとっぷり浸かっている家に生まれてきました。日本の古典芸能の世界では、学校というような教育機関がないものですから、自然、家単位で、その家で祖父から父、父から子供、子供から孫へ、あるいは内弟子にそれを教えていって、それを伝承していくというのが従来のやり方でした。これは私、ベストのやり方ではないと思ひます。しかし、ベターなやり方と申しますか、いまの社会情勢ではやむをえない伝承の仕方、今もそういう伝承の仕方をしてるわけです。

そういう事で、私は生まれながらの狂言役者であって、人よりちょっと早く舞台上に立った訳ですが、ところがその伝承と云うもの、伝統と言うものの中におりますと、回りからご覧になる方はまた違った伝統に対する見方、取り組み方と言うのが生まれて来るのだと思います。はっきり申しますと、人様から伝統、伝統と言って非常に崇められる、珍重される物の中には、とんでもなくわせ物が含まれている。とんでもない偽物が、伝統の中には、伝統と目されている中にはある。そういう事を私は、子供心で感じておりました。その疑問というのを解き明かしながら、自分なりに解釈しながら、あるいは、いろんな人に質問しながら、今日まで伝統の中に生活してきた訳でございます。

伝統芸能の新しい考え方

表題は「伝統を越えて」という誠にあつかましい題を付けているわけですが、私はまだ越えているわけじゃございません。越えようと思っているわけです。後50年ぐらい生きるつもりでございますから、そのうち何とか越えられるのじゃないかと思うのですが。じゃあどういふ所を越えていこうとするかと言いますと、なるほど狂言の持っている先ほどの声、あれも昔からああ言う声でやっていたわけで、稽古の時も全部あの声を出してやるわけです。これも一つの間違った伝説でございますが、こういう話をよく聞くのです。

と言うのは、私の家がそういう風に狂言を昔からやっていて、京都御所の近くの、もう少し東に行くところの鴨川がございまして。今出川の橋があって、私たち子供の時分に、その鴨川の両岸に立ちまして、お弟子が鴨川の西側の岸に立って、先生が東側の岸に立って、そして大きな声でさっきのような台詞を言う。そしてそれに対して弟子の方は、鴨川の川ごしにそれを受け答えする。特に寒中、寒いときに北風がびゅーびゅー吹きすさぶ鴨川の対岸同士で立っていて台詞を言っても、それがよく聞こえないやいけなような、そういう様な練習の仕方をした。鴨川の両岸に立って台詞を練習するのが、茂山の家のやり方だと。こういう事を私はよく聞くのですが、そんなことは全然ないのです。嘘なんですね。伝説というのはいい加減なものですよ。しかし、あまりよくそんなことを聞きますと、何かこんな事をやったような気がするなあ、と思ったりするのです。これは、寒稽古というのがありまして、寒稽

古の寒い空気の中で声を出す練習などを致しましたが、ずっと昔は鴨川の所でやっていたかも知れません。しかし、いま鴨川でそんなことをやったら、それこそ人だかりが出来て大変なことになります。先ほどのピンカートンに対する蝶々さんみたいな事になってしまうかも知れません。そういう事はやりません。

しかし、そういう様な伝説が生まれるほど、私の家の狂言の伝承の仕方が非常ご大そうに世間では考えられるわけです。ともかくそういう伝説が生まれるほど、ああ言った大きな声といいますか、実はよく通る声だと私は思います。通る声を狂言師が出て台詞を言う。あるいは非常に明快な、はっきりした、大げさな、誇張されてしかも省略された仕草をやる。その表現力というものは、なるほど私は大変なこれは技術だと思います。狂言の持っている素晴らしい伝統であり、伝承すべき、次に伝えなきゃいけない技術であろうと私は思います。なるほどそういう物は大変大事なのですが、そういう物を含めた伝統を一つの権威として、何か値打を付けようとするような構えみたいなものがあるわけです。つまり狂言というのは、「こんな素晴らしいものですよ、あなたがたにわからないでしょう。わからないほど素晴らしいのですよ。」と、こういう様な言い方がよくあります。

それから、こういう事を我々よく言われます。「狂言と呼び捨てにするといけな。」と言うのです。「お狂言」と、おの字を付ける。能もそうです。「お能」と言います。それから私たちがやっている芸も、おの字を付けて「お芸事」と、こう言う。何でも日本人はおの字を付けると、何か自分自身がちょっと上品に見えるのです。「お紅茶」、「お珈琲」。私このあいだ東京でおもしろい事を聞いて吹き出したのですが、ある銀座の喫茶店で、皆さんがご想像になるような御婦人です。その御婦人が「おコココーラ」とおっしゃったのです。これ、一回で言えませんか。今晚、練習してみてください。「おコココーラ」これはなかなか言えないですよ。あの御婦人、大変練習してきたのだと思います。一瞬、しかし耳を疑いました。そういうのと同じように、お狂言とかお能とかお芸事という事はおの字を付けて、我々は呼ばれる。

それから私は故意に、狂言役者という名前を使ってやっておりますが、我々の仲間では狂言役者という言葉は余り使わない。「狂言師」と言って、おっしよさ

んの師の字を書くのです。一般的には師を付ける。「能楽師」とか。私は余り好きな言葉じゃない。役者に徹したいと思って、狂言役者という言葉をも自分で使っております。そういう風にして狂言と言うもの、あるいは能と言うもの、古典芸能と言うものを大変自分たちの生活とはかけ離れた、雲の上に置くような一般の見方、そしてそれと同じように、内部の人が余計そういった風に飾りたてて、これは大変なものなのだ、大変素晴らしいものなのだ、一般の方にわかるような物じゃない。皆さんの生活と違ったところに我々は居るのだ、と言うような構えをして、それが伝統だ、と言うような言い方をしばしばすることがあるのです。実は内容と何も関係ない。私は「お狂言」と言われるようなつまらない芝居はやりたくない。「お狂言」という時には皆さんは、お狂言を拝見するとおっしゃるのです。拝見されるのは大嫌いです。向こうが難しい顔をして頭を下げながら狂言を見られると、我々役者は、狂言は笑いの芝居ですからやっていられないのです。

具体的にこんな事がございました。私ずっと何十年かの間、できるだけ学校に出かけまして中学校、高校あるいは小学校の場合もございますが、学校の現場で、体育館のステージの上で狂言をやって生徒さんに直に見てもらう。そういう事をずっと30年近く続けておりますが、その中でこういう事が一度ございました。

ある山陰地方、山の中、小さな350人ぐらいでしたか生徒さんの数が。中学校でした。私たちが狂言を始める前に校長先生が私たちを紹介して下さいました。非常に難しい顔をした謹厳実直を絵に書いたような先生でしたが、その先生がやおら壇の上に上がられて、「えーこれから、はるばる京都からやって来てもらった狂言をみんなで見ることになる。狂言というのは大変崇高な芸術であって、いやしくもこれを見て笑うような事があってはいけません。」こうおっしゃったのです。

私、最初は「すえひろがり」という狂言をやったのですけれども、これは余りおかしい狂言じゃございませんけれども、やはり、時々笑いがないとやってられないのです。笑いの芝居というのはお客様の笑い声をちゃんと計算して創られているのです。落語、漫才、あいうものが昔はラジオ、テレビのなかった時代です。ラジオでやるときには、スタジオの中で落語とか漫才をやった訳です。お客が全然いない。そこでやる

わけで、大変やる人はやりにくかった。そこで公開録音というのが始まった訳です。お客さんを実際に入れて、そして笑うべき時には、お客さんに笑ってもらって、その笑い声も入れて一つの雰囲気づくりをしていく。本来、笑いの芝居、笑いの芸と言うのは、お客の笑いと一緒にセットになって生きているもので、だから狂言も笑ってもらわなきゃいけないときに、お客の笑いがないと先に進まないのです。ごちなくなると、何かしらけた雰囲気になってしまう。

その時の「すえひろがり」がそうでした。子供たちは、その当時、今よりはだいぶ素直な子供たちが多かったですから、ともかくおかしいでしょう。一生懸命笑いを堪えて、涙をいっぱい溜めて見ている子もいました。いたたまれなくなり、私は「すえひろがり」がすんだら、衣装を着たままで校長先生の側に行きまして、「狂言というのは笑って見て頂いて結構なんです。どうぞ生徒さんに笑って頂くように言って下さい。」と言ったのです。そうしたら「はい、わかりました。」と壇に立たれて、「今、許可があったからこれから笑うように」。こういうような、それこそ笑えないエピソードがあるのです。

その先生は悪気があっておっしゃったのではない。おそらくその先生は、狂言と言うものを一度もご覧になったことがないのだと思います。しかし狂言と言うのは大変古い芸能で、大変難しい謹厳実直なものであると。だから生徒が笑うような事をするとう失礼にあたると、そういう気持ちでわざわざそういう事をおっしゃったのだと思います。

一般的に狂言をそういう風に考えていらっしゃる。それが狂言というものの伝統だと思われる面も、非常に強いのではないかと思います。それが我々の仲間にもそういう事を、さっきも申しましたように狂言の回りにいろんな飾りを付けていく。そして自分は狂言をやっているから自分も偉いのだと、狂言という素晴らしいものをやっているから、自分は素晴らしいのだと言うような思い上がった考え方で、狂言に対して我々の仲間もたくさんございました。そういう事に対して我々は非常に反発をこの時は感じていたわけです。

伝統芸能の開放

それからもう一つ、伝統らしき物を飾りたてるだけ

じゃなしに、それを私物化してしまう。あるいは営業の材料にしてしまう。こういう様な現象が、明治以後大変強いのでございます。別に狂言とか能とかを飯の種にしていると、いうことではありません。私自身、それを飯の種にしているわけですからそういう事を言っているのではないのです。狂言とか能とか、あるいは日本の伝統芸能というものを、本質とは何も関係のないところで、一つの組織をこしらえまして、それを売り物にする。はっきり申しますと、たとえば家元とか宗家、お茶やお花にもあります。我々狂言にも能にもあるわけです。実はこの能とか狂言というのは決して私物ではないのです。我々の祖先からずっと受け継がれてきた、民族的な遺産です。みんなの共有財産なのです。その共有財産を人に知らさない、自分たちだけで一つの、はっきり申しまして金儲けの元にするために、一つの組織作りをしてしまう。一つの企業としてその伝統を扱って、自分たちだけの伝統にしようとする部分が、明治以後に大変強く現れてきた。私は、その最も顕著なものが、家元と言われるものだと思うのです。

卑近な例でこれは申し上げると悪いかも知れませんが、家元という組織はどのようになっているか、皆さんも中にはお茶とかお花とか、三味線とかあるいは謡なんかもやっていらっしゃる方があるかも知れませんが、非常にわかりやすく、家元がいかに経済的な企業であるかと分かる例を一つだけ申しますと、京都にたくさんお花の家元があります。日本でも一番代表的な流儀に属する流儀の会館が京都にあります。名前は申しません。申すと私、叱られますので、実はあそこの人たちをよく知っていますのでね。そこに大きな会館があるのです。大変大きな殿堂です。そこへ入りますと、入ったところに大きな階段があります。その階段を上がりまして、その階段の上に踊り場があって、そして左右に、また階段があって二階に上がれるようになっていて。昔の王宮の建物を想像して頂くとよく分かる訳です。その階段を上りましたところに壁があります。石の大きな壁があるわけですが、その壁はいろんな大きさの石がはめ込みになっているのです。一番大きなのは1メートル半ぐらいあります。小さなのは煉瓦みたいな物、それがこうずっとはめ込んで一つの大きな壁になっているのですが、その壁に全部名前が一つづつ書いてある。あるいは何とか支部と書いて

ある。聞きましたら一番大きなのが、その会館が建ったのは、今から25年ほど前だと思いますが、一番大きな石に名前を書いてある人は、当時の金で100万円出しているのだそうです。一番小さなのは5万円だそうです。つまりその壁がその家元と言うものを象徴しているのではないかと思います。

そう言ったいろんな形で、お金を貰う。いろんな名目です。たとえば免許を与えるとか、あるいは我々の所ですと、習い物と言いまして難しいものをやる時には、家元にお金を積まないと言わせて貰えない。自分がやれるかやれないかの問題じゃないのです。金さえ出しゃ出来る。そう言った組織作りの中で、今の家元制度、つまり家元と言うのは伝統を日本では保持するために創られた組織のように皆さんお考えになりますが実は、そんなものじゃなくて、家元と言うのは、一種の家元という組織のピラミッド型の傘の下にいる人にとっては非常に大事な企業ですから、その中で経済的に活発にお金が動かないことには、生活が出来ないのですけれども、それと実際の我々の場合は舞台上で表現する能とか狂言と言う芸、あるいはお茶とかお花の場合ですと、その人がお花を生けたり、あるいはお茶を点てたりする時の表現の力と言うものとは、組織そのものとは何にも関係がないのだと思います。現に100万円納めれば、ともかくその流儀の中では最高の、つまり師範のあれが貰えるわけです。いくらうまくても、いくら一生懸命頑張っても、金がなきゃそういう地位は生涯得られない。私たちの方でも、やはり私は茂山という狂言の家柄の息子ですから、私はある程度有利です。いろんな事をやりますので、こんな事は私だから喋れるので、私の弟子がこんな事を喋ったら明日から全部首になってしまう。そういうふうな制度、組織の中に我々はおかれているわけです。

先ほども申しましたが、私はそういう事に対して非常に子どもの時分から反発を感じていた。たとえばその伝統の中にこういう伝統もあるのです。つまり狂言役者は、我々です、我々は他の芸能のジャンルの人と一緒に仕事をしてはいけない。あるいは自分の持っている知識、技術を他の演劇のジャンルの人に、それを教えてはいけない。こういう様な厳しいタブーと申しますか、そういう物がずっと昔から厳として存在している。それを犯しますと、破門とか除名とか言う制度があるわけです。そういうだんびらを振り回して来

るわけです。除名とか破門をされますと、その仲間と一緒に付き合いが出来ない。私たち役者は、一人では狂言が出来ませんから何人かとやらなくちゃいけない。そうするとその人たちは狂言をやれなくなっちゃう。例えば、一緒にやりたいと思っているのが私の兄であり父であっても、私が破門されてしまうと、私は父とは狂言が出来なくなってしまう。そういう様なことが事細かに決められていたわけです。これが太平洋戦争が始まる前までは、非常に厳格に行われていた。先ほどの女性に狂言を教えるはいけないのも、その一つのルールなのです。そういう事に対して私は非常に反発を感じまして、出来るだけ喧嘩してやろうという気持ちになりました。ともかく、だいたい昭和の25年から35年ぐらいにかけまして、いろんな事をやりました。やっちゃいけないことは全部やる。ともかく大変忙しかったですけれども、おもしろかったですよ。いろんな事をやりました。

例えばストリップというのがございますね。皆さんは余りご覧になったことがないと思うのですが、皆さんがご覧になったら、ちょっと気持ち悪いですけども。私は割に好きでよく見ます。好きで見ただけではなくて、私の30才ぐらいの時ですか、そのストリップの振付けなんかをやりにまして、えらい問題が起こりまして、私は何度も何度も破門されかかって、首が幾つあっても足りなかったのですが、その都度、尻をまくったわけです。

つまり、狂言もストリップも芸能だ。それがどちらが上でどちらが下だなんて事はお客様が判断することで、我々自身が判断することではない。私はストリップは素晴らしい芸能だと思います。そのストリップをより良い芸能に創り上げるために、我々は自分の持っている狂言という技術を使って、それを舞台の効果をより高めるために、役者として芸能人として当然の事をやっているのだと。こういう事を言いますと、昔の年寄り、私はいま、もう年寄りになりましたけれども、その当時の年寄り、何の事か全然分からなくなっちゃうのですね。それで黙ってしまうのです。そういうおかげで私は、そういう事でいろんな人がやらないような事をやりました。

最後には私、葬式をやりました。自分の葬式。皆様の中で自分の葬式をやられた方ありますか。これは一つの世の中に対する抵抗でやった訳ですけれども、私

が還暦の年、今から7年前ですが、自分で葬式をやりました。ちゃんと死亡公告を出しましてね、そしてみんなに来て貰って、御香典をちゃんと貰って、お経をあげて貰って棺桶の中に入る。棺桶の中に入って、今度は赤いちゃんちゃんこを着て棺桶からとび出すのです。これは私が始めたのではなく、関西では昔よくやっていた事なのです。還暦と言うのは生まれ変わる訳です。60年、自分と同じ干支が回って来る訳です。そういう時に、1才から出直す、やり直す。還暦と言うのは、暦を還すと書きますから一生が終わって、そこからまた新しい一生をふりだすと言う意味で還暦というので、昔からよく洒落でやったのだそうです。

有名な大阪の噺家がそれをやりまして、棺桶の中に入ったのです。そうしたら友達がぞろぞろやってきて、香典をおいてお経を唱えるのですが、何人かやってこない。そこで棺桶から首を出しまして、「あいつ だけえへんか」と言ったような亡者もあったそうですけれども。私それをやったり、これもつまり現代のお葬式というのが余りにも、それこそ妙な変な伝統で、形式的に流れすぎていて、仏様のためには、ちょっとになっていないのじゃないかと思います。現在に生きている人のための葬式であって、死んだ人間のための葬式では決していない。私はあんな葬式をされるのはかないませんから、自分で自分の葬式はちゃんと演出して、自分で好きなような葬式をするのだと言う気持ちで、その時やったのです。

万事、私はそういう風にして一般の世間の常識とか伝統を含みました我々の、いわば過去に足を引きずっているような世の中のいろんな仕組み、考え方、そういう物に対して、我々はまず疑ってかかるべきだと私は思うのです。能やら狂言の私たちは、その実際の型、技術にしましても、長年の流れの中でずいぶん変わってしまった。元の意味からはかけ離れた形だけが残っているものが非常に多いのですが、私はそのかけ離れた形だけの部分が、なぜそういう物が生まれたかという解釈が付くまでなかなかやれない。やってもいい気分になれないのです。そういう事は私は、かつていい言葉でいいますと、「伝統の批判的摂取」という言葉を使っております。伝統は絶対的なものではないのだ。それは自分にとって、あるいは今の世の中にとってどういう意味を持っているのだ、それはどういう訳で生まれてきたのだ、ということを見極め

「伝統を越えて」

て、そしてこれはやはり後に伝えるべきものであることを、確信を持って伝承していかなくてはならない。それを人に伝えていかなくてはいけないというような事を、私はいつも考えているわけです。それが言葉を変えますと、「伝統を越える」ということになるかと思えます。

私の好きな言葉、実は私がつくった言葉ですので、たいしたことはありませんが、「伝統はそれを越えて行くもののためにだけある」。伝統は伝統を越えてい

くもののためにだけある。決して伝統は商売のためにあったり、個人の私物化するためにあったり、そういうものではこれは伝統が非常にかわいそうだと思います。伝統の冒涇に私はなるのじゃないかと、そういう様なたいそれた発言をする訳ですが、先ほど申しました通り私は狂言役者です。嘘つきですから、どうかそのつもりで今日の話全部聞き流して頂ければ幸いですと思います。つまらないお話でございました。どうもありがとうございました。